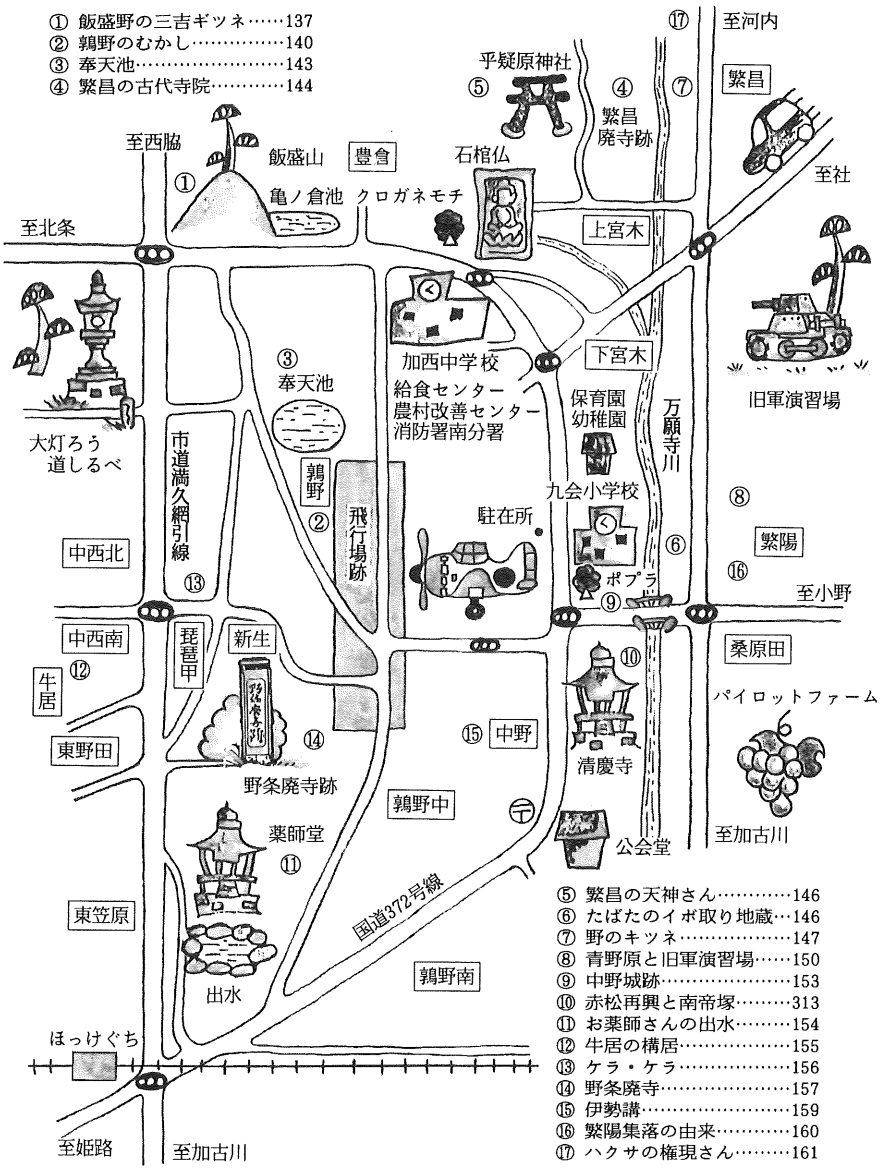
# 7　鶉野の丘陵　　10.0キロメートル




① 飯盛野の三吉ギツネ……137
② 鶉野のむかし……140
③ 奉天池……143
④ 繁昌の古代寺院……144

⑤ 繁昌の天神さん……146
⑥ たばたのイボ取り地蔵…146
⑦ 野のキツネ……147
⑧ 青野原と旧軍演習場……150
⑨ 中野城跡……153
⑩ 赤松再興と南帝塚……313
⑪ お薬師さんの出水……154
⑫ 牛居の構居……155
⑬ ケラ・ケラ……156
⑭ 野条廃寺……157
⑮ 伊勢講……159
⑯ 繁陽集落の由来……160
⑰ ハクサの権現さん……161

・繁昌廃寺

鶉野は古墳時代から奈良時代にかけて、この地方を支配した針間鴨国の豪族の舞台です。繁昌廃寺は、殿原、吸谷廃寺とともに、これら豪族が七世紀頃に建てた大寺院です。

・繁昌廃寺出土古瓦・天神山瓦窯跡出土古瓦・山の脇瓦窯跡（県指定文化財）

繁昌廃寺の古瓦は、忍冬唐草模様のある平瓦や単弁八葉蓮華模様のある丸瓦が知られ、すぐれた技法で、中央朝廷との深いつながりを知ることができます。

・清慶寺石造宝筐印塔（県指定文化財）

鎌倉末期の嘉暦二年（一三二七）の造立、姿態もよく、四方仏の彫法も珍しい。

・野条廃寺跡（市指定文化財）

奈良時代後期（八世紀中頃）の古代寺院跡です。鴨国の寺院の一つで、塔の遺構や瓦など貴重なものが残っています。

・清慶寺板碑（県指定文化財）

正和三年（一三一四）の造立年代が知られる板碑で、古墳時代末期の精巧な家型石棺の蓋石を使っています。

・上宮木石仏（市指定文化財）

軽快鋭利な彫法をもつ南北朝期の石棺仏です。

・繁昌五尊石仏（市指定文化財）

古法華石仏とともに、日本でも最古にあたる奈良時代前期の大陸的様式の石仏です。式内社乎凝原神社境内に祀られていたものですが、繁昌廃寺との関係が知られます。

・飯盛山

播磨風土記にその名がみえる古代からの聖地です。

・乎疑原神社鳥居・梵鐘（市指定文化財）

## 飯盛野の三吉ギツネ（豊倉町）

飯盛山にあるお稲荷さんの近くに、昔、三吉ちゅう名のキツネが住んどった。こいつは、なかなかのいじわるギツネでのう。よう人をばかしたもんや。花嫁の姿にばけるのが得意やった。池の沢でアオンドロをすくうて来て、自分の頭に乗せるんや。そしたらもののみごとにきれえな嫁はんになる。何人の者がこいつでバカされたかわからんがのう。

そうや、こんなこともあった。あの飯盛山の南の松林の中にごつい石灯ろがあるのを知っとるかのう。その灯ろによじのぼって、窓から中をいっしょけんめにのどいとる男があるんや。そしてその男はしきりに

「こんばんわ、ごめん下さいまし」

いうて、叫んどる。

「そんなとこへ登って、どないしよんね」

いうて下から二、三度大声でたんねたら、やっとのことで気付いたその男のいうにや、

「道に迷おてしもて、方角もとんとわからんようになりました。誰にも出合わんので心細うて心細うて、とほうにくれとりましたら、松林の間から明かりがチラチラ見えたんです。ああありがたいと喜んで近づいて来ましたら、明々と明りをともしたそれはそれはご殿のような立派なお家があったんです。やれやれこんな

大きなお家ならきっとどこかへ泊めてくださるだろうと思って入口から声をかけておりました。」

というんや。

「そいで、その家の人は誰ぞ出てったかい」

と聞いたら、

「それがいくら呼んでみても誰も出てくる気配がありませんので、困っていたところです」

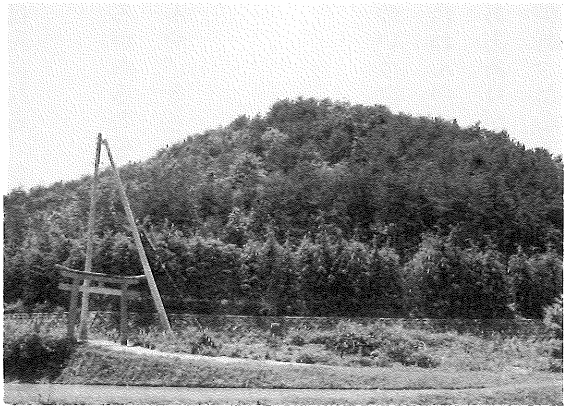
という。

「そりぁあんた、てっきり三吉にやられたんやわ」

いうたら、その男は、それこそキツネにつままれたような顔しとったがなあ。

ところが、この三吉ギツネもなかなか義理がたいところもあったんや。

ある日、福崎からの帰り道、西光寺野（福崎町南田原）を通りかかった男があった。この男を「もし、もし」と呼びとめる女があったんやな。見たらまだ若い、それはそれはきれいな女の人やったそうな。女は、「あなたは、加西へお帰りですね。もしそうならお頼みしたいことがあります。どうかお聞きとどけ下さい」



という。見たこともない女なんで、不審に思おたその男が、
「それで、あんたはんはどなたですね」
と聞いたら、
「実は、わたしは飯盛野の三吉ギツネの家内でございます。昨夜、無事子どもを産むことができました。安産でしたのでこのとおり大変元気です。きっと三吉さんが心配していると思いますから、安心するようお伝え下さい」
と頼んだそうな。一度はびっくりしたこの男も、キツネにもこんなやさしい思いやりがあるのかと感心したんやな。
「よしよしきっと伝えてやろう」
と、約束して飯盛山まで帰って来たんや。男は、お稲荷さんの方に向いて、
「オーイ、三吉。西光寺野のお前の嫁はんからのことずけや。昨日の晩、子どもが産まれたが、安産で親も子も元気やから安心せえ」
大声で伝えたんや。ちょっとしてから声がしたそうな。
「ごしんせつにありがとう。どうもありがとう」
ほんまにうれしそうな声やったそうや。

「何かお礼がしたいのですが、何にもありませんからこれでしんぼうして下さい」
いうたかと思おたら、あたりが急に真暗(まっくら)になって、目の前に久留女(くるめ)がすりを織っている機織(はたお)りの場面がちょうど活動写真を見るように映ったそうや。
三吉ギッネは、久留米がすりの一反もお礼にしたかったんやろうが、持ちあわせがなかったんやなあ。
この話が広がってからは、もう誰も三吉ギッネを悪く言うものはおらんようになったんや。

（前田今治氏の話より）

## 鶉野のむかし（鶉野町）

飛行場ができるまでの鶉野は、文字通りほとんどが鶉の鳴く野原で、広々としたススキの原と、どこへ行っても同じような松林が続いていました。
ところが、縄文・弥生の昔から、江戸時代に至るまでの長い間、東西をつなぐ大きな交通路がこの鶉野を通っていたのだそうです。
弥生時代から古墳時代（四〜五世紀）に入って、この地は針間鴨国として栄え、大和の都との間に盛んに

人々が行き来しました。美作や佐用など西の国から鉄器などめずらしい産物がはこばれ、にぎやかに物々交換がなされたのです。

奈良時代（七〜八世紀）に入ってからも、鴨国はいよいよ栄え、この道によって都の文化がどんどんと入って来ました。鴨国の豪族は、都にならって大きな寺院を建立して仏教を信仰しました。この鶉野には、繁昌と野条にそれぞれ都に負けない壮大なお寺を建てたのです。これらの寺院におまいりするために、多くの人々が鶉野に集まったのにちがいありません。

しかし、平安時代（九〜十二世紀）になると、鴨国造の勢力はだんだんに衰えて、お寺もその勢いが失せ、やがては崩れ落ちる運命に向かっていったのです。

鎌倉時代（十三世紀頃）からは一般庶民の動きが活発になり、大勢の人たちが盛んに行き来するようになって、鶉野の街道も再び活気をとりもどして来たのです。各地でにぎやかな市が開かれ、人々は品物を持ちよって、三々五々商いをしました。またみんなは深く仏教を信仰するようになりましたから、開墾で掘り出されていた古墳時代の石棺に仏像を刻みましたし、法華山一乗寺へは、遠くか

らもたくさんの巡礼が、毎日のように参詣しました。鶉野には縦横に街道が走り、旅人の姿が絶えなかったのです。

江戸時代に入ってからも、法華山詣の人々を中心に、商人や武士たちが、この鶉野の街道にたくさんの足跡を残し、一夜の夢を結んで通り過ぎたのです。

山陽裏街道として大名行列も通過しました。

街道にそって宿屋や商家が建ち並んでいたのは、いつの時代からであったでしょうか。

今も鶉野には、上の町・中の町・下の町という地名が残り、にぎやかであった姿をしのばせてくれます。また鶉野を走る網の目のような小路（こみち）の辻々に、立派な道標が、今は絶えてしまった旅人を、今日も待っているかのように淋しくたたずんでいます。

中でも、飯盛山の南、大形農道交叉点を南へ二、三百メートル下った道の西側の松林の中にある道標と、高さ八メートル以上もあろうかと思われる大石燈ろうは、何よりもよくこれを物語っています。この道標や燈ろうの火が、ただでさえ方向のわかりにくいこの鶉野を渡る旅の人たちに、どんなにか力強いささえになったかは、想像するにむずかしいことではありません。

（石野重治氏と塩河捨松氏の話より）

## 奉天池（ほうてんいけ）（鶉野町）

鶉野にある奉天池は、三原池（さんばらいけ）ともいいますが、日露（にちろ）戦争奉天陥落（かんらく）の明治三十八年に完成した大きな池なのです。

この池ができるまでの鶉野は、上の町・中の町・下の町という地名がありながら、五、六軒しか家のない、鶉野新家という淋しい所でした。丘陵地ですので水がなく、開墾しても畑にしかなりません。作物はソバ作が主で、子どもの頃よく「鶉野のソバカキ」とひやかされたものです。池ができて米が作れるようになると聞いた時は、ほんとうに涙が出るほどうれしかったものです。

殿原から万願寺川の水を引いて来て貯水する池を造るのですから、大工事です。当時のお金で一万円という気の遠くなるような大金を要したのです。一日の人夫賃が二十五銭で、夜中の三時頃から並んで待つ人達もあったのです。完成の喜びを奉天陥落にかけて名前にしたこの池のおかげで、鶉野も水田が作れるようになりましたが、喜んだのもつかの間、水田には重い税がかけられました。鶉野新家（しんけ）の人たちは、税が払えないと、水田一反（十アール）に酒三升をつけて、買ってくれる他村の人に手渡してしまいました。

（塩河捨松氏の話より）

## 繁昌の古代寺院（繁昌町）

繁昌町川西には、大昔のお寺の跡があります。今は水田になっていますが、田の名前に、塔の塚とか、阿弥陀屋敷、弁才天、倉の垣内、大坪などというようなお寺にちなんだ名前が残っていますし、つい五、六十年前までは、この付近には大きな杉並木や濠なども残っていたのだそうです。それに塔の塚には、牛が寝そべった程もある大きな土台石が二個あったといいます。何でも開墾の時じゃまになるとかで、わざわざ高室から石屋さんを呼んで、細かく砕いてしまい、万願寺川に捨てたのだそうです。

今でも、付近の水田の下からは、たくさんの瓦が出てくるそうですが、この瓦には、奈良にある法隆寺の瓦とそっくりの紋様がついているのです。この紋様は、繁昌廃寺が、今から千三百年以上も前の白鳳時代に栄えたお寺であったことを、私たちに教えていますし、大和の都との深いつながりを知ることができます。

この頃、今の加西市は、針間鴨国と呼ばれ、たいへん文化の栄えたところだったのです。それより昔、遠くは石器時代から縄文・弥生時代を経て古墳時代にかけても、播磨の中心地でした。玉丘古墳をはじめ、多くの古墳が造られたのもこのためです。

針間鴨国造（首長）は、とても強い勢力をもっていましたので、大きな交通路が都から今の宝塚・有馬・三木・小野を通って、鴨国へ通じ、福崎・山崎を経て美作へと達していたのです。たくさんの人々が、

都から鴨国へ、鴨国から都へと行き来しました。

そこで、鴨国造は、この交通路にそって、楢原里と上鴨里・そして修布里に、それぞれ立派な寺院を建てたのです。楢原里のお寺が繁昌廃寺にあたり、上鴨里のお寺が殿原廃寺、修布里のお寺が吸谷廃寺にあたります。

繁昌のお寺は、空高く塔がそびえ、大きな金堂や立派なかまえの講堂が建ち並んで、その間を回廊がめぐっていたのです。東西八十メートル・南北百八十メートルの広い境内には、絶え間なく読経の声が流れ、南大門からは、参詣の人々が続いていたのです。

しかし、この大寺院も、律令制度が浸透してくるにつれて、地方豪族たちとともに没落の道をたどり、次第に荒廃して、やがて夏草の生い茂る廃寺となってしまったようです。里の人たちは、高野山から僧兵がやって来て、この寺を焼いてしまったのだと言い伝えています。

いつの頃であったか、寺跡近くの普光寺川から、石に刻まれた五尊像がひろいあげられました。きっと、繁昌のお寺の本尊であったのにちがいありません。

（山本辰三氏の話及び「兵庫県史」参考）

## 繁昌の天神さん（繁昌町）

乎疑原神社は、延喜式に記されており今から約千百年も昔に、加西・小野にまたがっていた河合郷三十五ヶ村の総社として造られた古い神社です。

醍醐天皇の時、百代寺の隆全という僧が菅原道真公の霊を、このお宮に合祀してから、「繁昌の天神さん」と呼ばれて遠近に聞こえるようになりました。播州路の春まつりのトップをきって、三月二十五日に行われる祭は、学業成就を願う学生たちでにぎわいます。

## たばたのいぼとり地蔵（繁陽町）

繁陽町堂の元にあるお地蔵さんは、「たばたのいぼとり地蔵」とよばれています。たばたという人がまつったとかでそういうのだそうですが、このお地蔵さんは、たいそう「いぼとり」に霊験があるのです。

「いぼはしわたれ」、「いぼはしわたれ」ととなえながら、自分のいぼをなでてからお地蔵さんのその部分をなでてお祈りするのです。

治れば、新しい「よだれかけ」を送るならわしです。

なぜか知りませんが、出来るだけ朝早くおまいりするのがよいのだそうです。

（繁陽町老人会の話より）

## 野のキツネ（繁昌町・滝野町）

青野原は、それはそれは気の遠くなるほど広い野原です。松やススキの原がどこまでも続いていて、中へ入りこむと、昼の日中（ひなか）でも方向をみまちがうこともしばしばです。それに、各所に旧陸軍の塹壕（ざんごう）などもあって、危険なところでもあります。今でもキジや野ウサギ、キツネなどのけものがたくさん住んでいます。

ある時、繁昌村の孫兵衛さんが、大門（加東郡社町）の親類に婚礼があるというので、よばれて行きました。家では、日の暮れるまでには帰ってくるというので、風呂をわかして待っていました。でも、日がとっ

ぷりと暮れてしまっても帰って来ません。物音がするたびに門先(かどさき)まで出て見るのですが、いっこうに帰って来る気配がないのです。

「道にまようてしもたんやないやろか」

「おいはぎにでも出あったんでは」

と、心配で心配でいてもたってもおれなくなったおかみさんは、子どもといっしょに迎えにいくことにしました。ちょうちんの明かりをたよりに、野(のう)（青野原）までやって来ましたが、誰とも出合いません。

心細くなった二人が、あきらめて引返えそうかと足を止めた時、どこからか鼻歌が聞こえて来ました。耳をすますと、どうやら主人の声らしい。

「ああよかった。やっと帰って来た」

と、胸をなでおろした二人でしたが、なかなか声が近づいてこないのです。

おそるおそるその声のする方へ行ってみました。

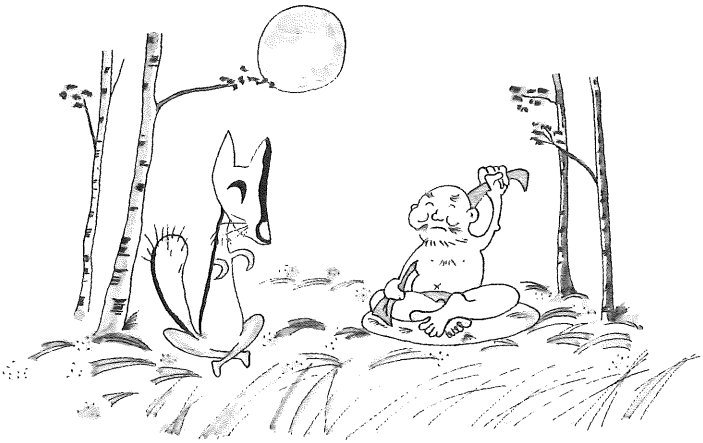
「おとうさん」

と、よんでみましたが、返事はなく、姿も見えません。あいかわらず鼻歌は続いています。

声のするあたりを、ちょうちんの明かりで照らして見た二人は、

「あっ」

と驚きの声を上げました。
何と孫兵衛さんは、大きな穴の中で裸になって、歌を唄っているではありませんか。二人は、
「おとうさん、おとうさん、おとうさんいうたら」
と叫んで、孫兵衛さんの身体を力まかせにゆすりましたが、孫兵衛さんは、キョトンとした顔をしているばかりだったということです。
　この話を聞いた村の人たちは、
「孫兵衛がまたキツネにばかされたそうな」
「野のうのまんなかで、風呂に入っとるまねさせられたいうこっちゃ」
「よめどり（婚礼）のごっと（ごちそう）を入れた風呂敷を、手ぬぐいがわりに使つこおてのう、いっしょうけんめい体ふいとったそうや」
「そいでのう、ごっとは、もうむちゃくちゃやったそうな」
「もったいないこっちゃ」
と、うわさしあったことでした。



キツネにばかされたという話は、いくつもあります。

腹痛(はらいた)で困っている娘を背負ったら、キツネだったとか、家に帰るのに、いくら歩いても家が見えず一晩中歩きまわって、イバラで体中傷だらけになったとか……。

それでみんなは、キツネにばかされないようにと、いろいろ工夫したといいます。ばかされるなと思ったら、一服してタバコを吸ったり、風呂敷の中に消し炭を入れて持ち歩いたりすると、効果があるのだそうです。

（繁陽町老人会の話より）

## 青野ヶ原と旧軍演習場

青野ヶ原は、加西・小野・滝野にまたがる南北七キロメートル・東西三キロメートルという広大な原野です。

この原野に開拓の鍬(くわ)を初めて入れたのは、文政年間のことと聞いています。石ころをたくさん含む赤土で、切り開くにはそれはそれは骨がおれた上に、高台のため水の便が悪く作物を作るのには大変な苦労がいった

のです。

それでも明治時代になると、小さな村落ができ戸数十数戸の九会村字繁昌野と呼ばれるようになって、貧しいながらも平和な生活が営まれたのです。

ところが、明治二十二年のこと、この青野ヶ原に軍馬育成場が誕生することになり、これがきっかけとなって三十三年には陸軍省が八百三十町歩（八百三十ヘクタール）にも及ぶ面積を買収して軍隊の演習場を作りました。繁昌野の人たちはしかたなく、苦労を重ねて開いて来た土地を追われ、別府へ六軒・繁昌へ五軒とちりぢりになって行きました。これ以来、青野ヶ原は戦争ときり離せない土地になってしまったのです。大阪師団の所轄地となった青野ヶ原には、明治四十年に「廠舎」が建ち、その名も第十師団高岡演習場となりました。四月から十一月まで歩兵が一個連隊ほど代わる代わるやって来ては演習しました。このため青野ヶ原はにわかに騒々しくなってしまいました。

大正四年九月には捕虜収容所が出来、演習場の一画に金網が張りめぐらされて、第一次世界大戦の捕虜が六百人以上も送りこまれて来ました。ドイツやハンガリー・イタリアなど母国を遠く離れたヨーロッパの人たちでした。捕虜の扱いは寛大な方で、田畑を耕すことが主な仕事でした。監視付とはいえ、北条の町の見学なども許されていましたし、地元の人たちともよく交流しました。

そんなことで、青野ヶ原には姫路あたりから続々と出店がやって来て店を開き、見違えるばかりの賑わいを見せたのです。

昔野原の青野ヶ原も　今は陸軍所轄地で
あまたの兵隊さんが練兵する
捕虜の収容所が出来てから　我も我もと店ひらき
好きな円ちゃんに会いたさに
そのまた苦労はいかばかり　ドン　ドン

昭和に入って、第二次世界大戦が始まるといよいよ軍の施設が拡大され、戦争が激しさを加えてくるに従って人々の気持は高ぶって来ました。青野ヶ原に少しばかり残っていた田も、軍の一方的な強制で取り上げられてしまい、ただでさえ食糧難の時代でしたからその日の食物もなくなり、親類、知人をたずね歩いてやっと米や野菜を求めることもしばしばだったのです。空襲は日増しに激しくなり、付近の人たちの間からも犠牲者が出るようになりました、そんな状況の中で、当時青野ヶ原に駐屯していた久留米の戦車隊に面会のため全国からやって来る家族の人たちがありました。交通の不便な土地ですから泊まる所もなく困っている人たちを、自分の息子も戦地へ行って苦労しているのだ、助けるのはお互いさまだと、食べるものを工面して泊めてあげたものです。

やがて青野ヶ原は、この苦しい戦争の体験を越えて終戦をむかえ、軍の廠舎（しょうしゃ）には開拓の人たちが入って、新しい時代の青野ヶ原が誕生したのです。

（山田政治氏の話より）

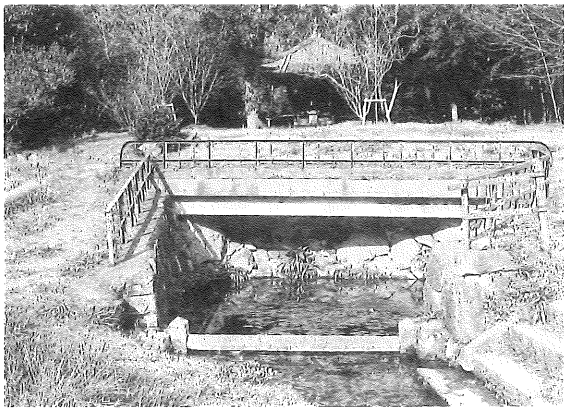
## 中野城跡（中野町）

河合郷の金釣瓶城の城主、中村小四郎助直らは、嘉吉の乱（一四四一）で滅んだ主家赤松を再興しようと、南朝方に入りこみましたが、中野城跡はこの時に、助直の家来で行動をともにした小谷与次という者の構居跡であろうと思われるが諸説があります。しかし、今の中野町は、当時中村と呼ばれていて、金釣瓶城下でした。

吉野に潜入した助直ら赤松遺臣たちは、まず小谷与次が僧に化けて南朝方に近づき、「実は私は、善防山城主赤松則繁の子ですが、ご承知のように、赤松家は足利将軍を殺し、そのために足利氏に滅ぼされました。それで、南朝方に味方して足利幕府を討ちたい」と偽って、お側近くに召しかかえられました。この与次の手引きで、赤松一党は吉野御所を襲い、皇子の首と曲玉をうばって逃げ帰ったのです。与次の郷里中村（中野町）で御首を葬ったのが清慶寺の南帝塚なのです。

# お薬師さんの出水（東笠原町）

東笠原町の薬師堂は、別名「目の薬師さん」と呼ばれています。目を患った人がお参りして、この薬師さんの出水で目を洗うと、すばらしいききめがあるというのです。



その昔、えらい坊さんがこの村に来て、小さな薬師堂を建てました。ところが、薬師如来におまつりする清水が近くにみつかりません。困ったお坊さんが、お薬師さんにお祈りしてさずかったのが、この出水だということです。

どんなに日照りが続いて、近くの鵜野にある池が干上がり、万願寺川が涸れても、この出水だけは美しい水をこんこんと湧き出させ、水量が変わることもありません。

人々は、加古川の水が河高（滝野町）からここへ続いて来ているのだと信じていました。

戦前までは三かかえもあるような大きな松の木が、何本もみごとな枝をこの出水の上に垂れ、この水のおかげで眼病がなおった人たちのお礼

に放した鯉が、元気よく泳ぎまわっていました。

昼夜をわかたず湧き出る水は、今も十町歩（十ヘクタール）以上の田をうるおし、地元の造り酒屋さんはこの水を宮水として使っています。

（内藤政男氏の話より）

## 牛居の構居（牛居町）

播磨風土記に、「昔、大汝命、碓を造りて稲つきしところは、碓居谷となずけ……」とある碓居が転じて地名になったという牛居町には、赤松一族の加東郡金釣瓶城主中村六郎友之の息子の城があったと伝えられています。

幼名は松千代丸といいましたが、牛居に居城を構えて、名も中村牛居之助吉早となり、天正元年（一五七三）足利将軍義昭と織田信長が争った戦で、同族の多可郡中野間伊

勢輪山城主有田伊賀の守とともに大きな戦功をたてたといいます。

しかし、信長が中国平定のため、羽柴秀吉を総大将に播磨に大軍を進め、三木城主別所氏を攻めたとき、赤松一族とともに牛居之助も城に籠(こも)りました。一年十ヶ月の籠城(ろうじょう)のすえ、三木城がおちたとき、牛居之助は城をぬけ出し、多可郡中野間に身をかくし、慶長元年九月十九日、七十五歳で世を去ったそうです。牛居の大歳神社には、その霊が祀(まつ)られていますし、立派な碑(ひ)が建てられています。なおその子小市郎は、牛居にとどまって武士をすて、一民間人となりました。以後代々前田姓をなのり荘官をつとめたということです。構居跡と思われる所は、大歳神社の前方で、「殿垣内(とのかち)」と呼ばれています。

（大歳神社の碑文及び前田つる氏の話より）

## ケラ・ケラ（琵琶甲町）

昔、牛居から琵琶甲(びわのこう)へ通じる道が、北へ琵琶甲の墓地のそばを通って細く続いていました。その墓のそばに、大きな松の木が生えていましたが、その木の根元で、ある時一人の旅の坊さんが行きだおれになりました。

それからというもの、人が夜ここを通りかかると、坊さんのかっこうをした大入道が出るようになりました。大入道は必ず「ケラ・ケラ」と気味の悪い笑い声を立てるのです。みんなはケラケラが出ると大そう恐れました。

誰も夜この道を通れなくなって困ったすえ、この松の木を切り倒すことにしました。するとどうでしょう、切り倒された木のそばから、大ダヌキが逃げて出たということです。

それ以来、ケラケラは全く出なくなりました。

（前田今治氏の話より）

## 野条廃寺（野条町）

野条町にある寺院跡は、鶉野台地の南端近くにあり、東方は六甲山まで遠く視界が開け、西方には真正面に善防山を仰ぎ西播の山々へと連っています。北方は市内の村落を越えて秀峰播磨富士（笠形山）が重なり、南方は糠塚山から印南の大地を経て明石、播磨灘へと眺望はまことに雄大です。

野条の人たちはこの場所を観音野と呼び姫路城の守り神であると信じています。そしてこのあたりには門

前、大門等の地名もあります。戦前までは南北八十メートル、東西七十メートルにわたる廻廊に囲まれた西塔・東塔そしてその後に金堂、後方に講堂をひかえた完全な薬師寺式伽藍配置の跡をそのままに残していました。残念ながら戦時中の飛行場建設と食糧増産のための開墾によって、今では西の塔の基壇のみを残すだけとなってしまいましたが、多数の出土瓦・土器・釘等から奈良時代八世紀中期の大寺院址であることが知られます。

市内にはこの野条廃寺よりさらに百年以上も古い白鳳期に逆のぼる繁昌・殿原・吸谷の廃寺跡がありますが、ともに播磨鴨国造の建立した寺院に違いありません。

昭和三十二年十二月に発掘調査が行なわれましたが、それより少し前に下里中学校の女生徒がこの廃寺跡で高さ八センチばかりの鍍金の釈迦誕生仏を発見しました。発掘調査では焼けた跡がはっきりついた瓦が多数でて、この寺院が建築後百年余りで焼失してしまった運命を示しているのです。

# 伊勢講（中野町）

伊勢講は、中世の動乱で神領を失った伊勢神宮が、その経済基盤として作りあげた信仰の組織である。毎月一日に一つの区域のものが集って、天照皇大神を祭り神酒をいただいた。以前は、立派な膳部をこしらえ酒宴を開いたところもあった。この日は、区域の戸主が全部集るので、諸種の報告や協議が行われる。近世の人たちにとっては、講日は信仰というより最高の娯楽の場であり、また数年に一度のお伊勢参りは唯一の旅行の機会であった。

伊勢の御師（下級神官）の活躍もあって、どのような海浜や山間の村でも講が組まれた。ほとんどは最寄ごとか、気心の合う家どうしが集まってできている。

中野町には十一組の伊勢講があるが、その大半は同じ姓の家で構成されている。たとえば、西講は三宅姓、東講は中村姓がほとんどである。中野町は、中世ごろ開かれた村と思われるが、中世初期まで鵜野の一部でただ一筋の街道が通じるにすぎなかった原野に、いくつかの集団が鍬を入れはじめ、村ができてきたそのなりたちを示すものと思われる。

（ふるさとのまち加西誌　県立北条高等学校提供）

# 繁陽集落の由来

現在、繁陽といわれている集落は、伝説によると加東郡河合郷長町村（ながまちむら）の金鑵城（金釣瓶城）の城主であった中村小四郎（一説では中村小三郎）の次男、内田伊賀守が、内田村（現在の八幡神社附近から西方・南方一帯）を開いたのが始まりといわれており、約五百年前のことと思われる。その時、中村（現在の中野）からも数家族が移住してきたようである。

当時、この地を流れていた万願寺川は自然の流れのままに流れていたため、洪水のたびに流路が変り、上流より運ばれた土砂が堆積して肥沃な低地を形成し、又、水利の便もよかったので、水田として開くにはつごうがよかったためと思われる。

しかし、洪水の心配は絶えずあった。特に、廣安年間（一六五〇年頃）の大洪水で、それまで八幡神社の東方を流れていた川筋が西方へ大きく変るなど甚大な災害をこうむった。

その頃、八幡神社の西には稲荷神社があり、更にその西に墓地があったが、この大洪水により稲荷神社と墓との中間が川になった。その後も、大雨のある毎に川が氾濫してたびたび被害が出るので、墓地は東方の高台へ、稲荷神社は中野の現在地へ、住家は東北方約五百米の地へ移転した。そして、繁昌その他から移住してくる人もあり分家も増えて、次第に集落を形成していった。

繁陽集落は、北部の山裾の一群を山添、中心部を大雨のたびによく流されたので「流」、南部の高台を上田と呼ばれているが、この三集落を一括して「流」とも呼ばれている。

明治時代には、繁昌村下垣内（しもがいち）と呼ばれていて、繁陽という名称が使われるようになったのは、大正の初めからしく、大正元年十二月に私設の消防組ができ、その際購入した消防ポンプに「繁陽消防組　大正二年一月」と記されている。以来、青年会・婦人会・農会等のすべてに繁陽の名称をつけるようになった。

しかし、行政上は繁昌の一部であったが、昭和四十二年加西市発足の際、自治組織としての繁陽町が正式に認められ独立した行政区となった。

（増田　弘氏の話より）

## ハクサの権現さん（常吉町）

常吉町の真中を流れている普光寺川に架っている権現橋の東詰めに、二坪ほどの土地を玉垣でかこい、石の祠があります。ハクサの権現さんです。

昔、旅の僧が歯が痛くなって倒れ、「わたしが死んだら、ハクサの権現といって祀ってくだされば、歯の

痛みで苦しむ人達を救ってあげます。」といって、なくなりました。

村人は、手厚くその僧をほうむり、「ハクサの権現さん」として祀りました。それ以後、歯の病にはたいへんご利益があるということが広がり、遠くからも沢山の人がお参りにくるようになりました。

お礼参りには、なぜかお箸を十二膳、水引きをかけてお供えするのです。

（菅野　チヨノ氏の話）